概要

審査請求人(以下「請求人」という。)に残存する障害は、障害等級第 11 級に該当するとして、障害等級第 12 級に該当するとした原処分を取り消した事例

要旨

1 事案の概要及び経過

請求人は、○会社にて業務に従事していたところ、平成○年○月○日、駐車場において頭上にスプリングのようなものがあつたが気付かずにそれで頭部を強打した。

請求人は同月○日、○病院を受診したところ、傷病名「頭頂部挫創、頭部打撲、頸椎捻挫、耳鳴り」と診断され、加療したところ平成○年○月○日治癒した。

請求人は症状固定後、障害が残存するとして監督署長に障害補償給付の請求をしたところ、監督署長は、請求人に残存する障害は、労災保険法施行規則別表第 1 に定める障害等級第 12 級に該当するものと認め、同等級に応ずる障害補償給付を支給する旨の処分を行った。

2 審査請求の理由

請求人は、審査請求の理由として、要旨、次のとおり述べている。

神経症状について、後遺障害診断書にも記載の頸椎 MRI にて C3-4 の椎間板圧排が原因と考えられる頸部痛という医師の異常所見が記載されており、12 級に該当する。

受傷後より訴えていた耳鳴りは○病院での検査結果より平均聴力レベルの結果は「右 40.8dB、左 44.2dB」となっており、11 級に該当する。

よって神経症状第 12 級、難聴第 11 級の併合により第 10 級の認定が妥当である。

3 原処分庁の意見

監督署長は、要旨、次の意見を述べている。

(1) 頭頸部の神経障害

MRI にて C3/4 にて変性した椎間板による後方への圧排が認められ、同部位にほぼ常時疼痛が認められることから「局部に神経症状を残すもの」(第 14 級の 9) に該当する。

(2) 耳の障害

耳鳴の残存について、ビッチ・マッチ検査、ラウドネス・バランス検査において耳鳴の常時残存が認められることから「耳鳴に係る検査によって難聴に伴い著しい耳鳴が常時あると評価できるもの」(準用第 12 級) に該当する。

(3) 以上のことから請求人に残存する障害は、併合第 12 級に該当すると判断した。

4 審査官の判断

(1) 請求人に残存する障害で検討すべきは、頸椎捻挫後に残存する疼痛等神経症状、頭部打撲後に生じた耳(聴力)の障害であると認められる。

(2) 頸椎捻挫後に残存する疼痛等神経症状の程度について、主治医は症状所見書において、要旨、「頸椎 MRI で C3~4 にて変性した椎間板による後方への圧排は加齢現象に派生している点も否定できないが平成○年○月○日の外傷に起因した可能性が十分に考えられ、この圧排に基づく頸部痛が労働に及ぼす障害の程度は、通常の労務に服することはできるが、時には強度の疼痛のため、ある程度差し支えがあると考える」と意見を述べている。

(3) 労災医員は「頸椎の 3 番目及び 4 番目に圧排が見られるが、その程度は深刻なものではなく軽微である。従って画像資料から判断すると、頸部痛の神経症状としては、「がん固なもの」までには到底、及ばないと判断する」と意見を述べている。

(4) 主治医意見は画像診断において、頸椎椎間板の神経根への圧排の程度(強弱)に関わらず所見したものと史料される。一方、労災医員の意見は画像資料から当該圧排の程度を見極め、認定基準に基づき所見したものである。

従って当審査官は労災医員の意見が妥当なものとして判断する。

(5) 原処分庁は、請求人から聴力障害に係る訴えがなかったとして、耳鳴りについて準用等級を決定している。しかし請求人は難聴を伴っていたと主張しており、耳鳴りが難聴を伴うものであれば「聴力障害」として等級決定すべきものである。

- (6) ○病院医師は聴力検査の結果で、平均純音聴力レベルは右 42.1dB、左 50.4dB。また最高語音明瞭度は右 55%、左 74%としている。よって、「両耳の平均純音聴力レベルが 50dB 以上のもの又は両耳の平均純音聴力レベルが 40dB 以上であり、かつ、最高明瞭度が 70%以下のもの」(第 10 級の 3 の 2)には達しないが、「両耳の平均純音聴力レベルが 40dB 以上のもの」(第 11 級の 3 の 3)に該当する。
- (7) 以上より請求人に残存する障害の程度は頸椎捻挫後の疼痛等神経症状「局部に神経症状を残すもの」(障害等級第 14 級の 9)に、両耳の聴力障害については「両耳の聴力が 1メートル以上の距離では小声を解することができない程度になったもの」(障害等級第 11 級の 3 の 3)に該当し、重い方の第 11 級に該当するものと当審査官は判断する。
- (8) したがって、監督署長が請求人に対してした障害等級第 12 級に応じる障害補償給付を支給する旨の処分は妥当ではなく、取り消されるべきである。